國學院大學学術情報リポジトリ

晦まされた右近の和歌リテラシー：夕顔巻の「心あてに…」歌は誰が作歌したのか

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小野, 真樹
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002337

晦（くら）まされた右近の和歌リテラシー
―夕顔巻の「心あてに…」歌は誰が作歌したのか―

小野　真樹

（1）はじめに

『源氏物語』の玉鬘物語においては、右近の果たした役割なしにこの物語が進まなかったことは誰もが承知のことであろう。まずは、初瀬参りで玉鬘に遭遇した僥倖が端緒となり、右近はもちろん源氏に引き会わせることを思うのだが、懸念されることがあった。このとき二十歳の玉鬘は、これまでの十六年間を筑紫で過ごしてきており、その鄙性に染まってしまっていておよそ都の貴族社会には馴染めないのではと危惧したのである。その程を確かめるのに右近は玉鬘に歌を詠みかける。これに関しては、前拙著[1]で論じたのであるが、簡単に言うと、右近は玉鬘の資質を和歌の素養で確かめたのである。古今集１００９旋頭歌と古今六帖１５７０歌を引歌して再会の喜びを詠みかけ、玉鬘がその二つの引歌を察知した証しを詠みこんで返してくるかどうかを試した。果たして、玉鬘は二つの引歌に共通する句「初瀬川」を初句に詠みこんで返し、右近を安堵させた。

右近「ふたもとの杉のたちどをたづねずはふる川のべに君をみましや
うれしき瀬にも」

玉鬘「**初瀬川**はやくのことは知らねども今日の逢ふ瀬に身さへながれぬ[2]」（玉鬘巻ｐ１１６）

＊**初瀬川**古川の辺に二本ある杉年を経て　またも逢ひ見む二本ある杉（古今１００９・旋頭歌　読人しらず）

＊祈りつゝ頼みぞ渡る**初瀬川**うれしき瀬にもながれあふや

と（古今六帖１５７０）

これをもって右近は躊躇なく玉鬘を源氏に引き会わせたのだが、果たして、玉鬘は六条院のヒロインとして六条院に集う男君達の心を悩ませ、実の父内大臣にも知らされることになり、女官としては最高の地位である尚侍となる。夕顔の遺児である玉鬘を探し出し、内大臣の血を引く姫君にふさわしい境遇を実現することは、夕顔の乳母子右近の内に秘められた執念であり、若くして亡くなってしまった主人への恩返しともいえるものであった。右近は、吉海直人氏の乳母・乳母子論[3]に言うところの行動原理そのもので、夕顔の乳母子として主人に誠心誠意尽くそうとするのであり、それだけではなく、右近は相手の和歌の素養を試すことのできる和歌リテラシーをそなえた人物として造型されているのである。

ところが、夕顔の巻を読むとき、我々は右近に対しそういう観点をもたないで読んではいないだろうか。右近は夕顔の乳母子であるということは、物語においてはとりわけ主人思いの行動（そ

れが主人の意図に沿うものかどうかは別として）をとると見るのは当時の読者の常識であった。そして、最も留意しなければならないことは、作品は右近に人並以上の和歌リテラシーを付与していることだ。読者は玉鬘巻を読んでそれを知るのであるが、戻って夕顔巻を読み返すときにはそれを思い起こすべきなのである。人物を造形する場合、最初にどんな人物にするか想定しているからだ。

夕顔巻は冒頭、源氏が「六条わたり」の女君に通う中宿りに五条の乳母を見舞うところから書き始まる。予め訪問を伝えていたものではなかったらしく門が閉ざされているので、惟光を呼びにやっているあいだのことである。この場面で隣家より源氏に歌が詠みかけられるのだが、この歌については古注釈以来異なる解釈が併存し、歌の実作者についても決着がついていない。それは、筆者に言わせれば、右近に対する認識が軽すぎたからなのである。当論考はこの場面の背後で右近がいかに行動し、歌は右近が女主人（以後、夕顔又は夕顔の君とする）にかわって代作したもので、そうであるならば歌意はどうなるかを論ずるものである。右近の代作説はすでに田中喜美春氏が論じているが[4]、筆者はその論を踏まえ、右近の和歌リテラシーを重視する観点からあらためて考察する。そのことによって、歌の解釈もおのずと収束すると考える。それは田中氏の解釈とは少し異なったものとなる。

（2）冒頭場面の背後を推理する

次に論考の対象となる冒頭場面を載せる。

この家のかたはらに、檜垣といふもの新しうして、上は半部四五間ばかり上げわたして、簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影あまた見えてのぞく、（中略）。

ア御車もいたくやつしたまへり、前駆も追はせたまはず、誰とか知らむとうちとけたまひて、すこしさしのぞきたまへれば、（中略）。

切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這いかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。源氏「をちかた人にもの申す」と独りごちたまふを、御随身ついゐて、随身「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、aかうあやしき垣根になん咲きはべりける」と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、この面かの面あやしくうちよろぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、源氏「b口惜しの花の契りや、一房折りてまゐれ」とのたまへば、この押し上げたるかどに入りて折る。

さすがにされたる遣戸口に、黄なる生絹の単袴長く着なしたる童のをかしげなる出で来てうち招く。白き扇のいたうこがしたるを、童「これに置きてまゐらせよ、c枝も情なげなめる花を」とて取らせたれば、門あけて惟光朝臣出で来たるして奉らす。（夕顔巻p135・136、以後冒頭場面とする）

源氏は、そのまま乳母の見舞いに入ってしまったのであるが、先程の扇に何やら書かれていることには気づいていたらしく、出がけに惟光に紙燭をもってこさせ扇を見るとやはり歌であった。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

（夕顔巻p140、以後「心あてに」歌とする）

冒頭場面を要約しよう。源氏は西隣の粗末な家の半部から女た

ちが簾越しにこちらを見ているのに気付いた。そして、その家居に這う白い花に興味を惹かれたので、傍線部ア、お忍びにもかかわらず気を許し車の窓から顔をのぞかせる。ここは源氏が女たちから顔を見られていることを示しており、後に取り上げる黒須重彦氏の歌の解釈に関わる所である。そして、源氏が古今１００７の旋頭歌（「うちわたす遠方人にもの申すわれ　そのそこに白く咲けるは何の花ぞも」）の上の句の一部を口ずさむと、それを聞き取った随身が下の句の「白く咲けるは何の花ぞも」という問いと受け取り、「夕顔の花」と答えた。源氏が随身に一房折りて参れと命じると、隣家から童が出てきて、白い扇を差し出し、これに枝を載せてさし上げよと言うのであった。そこに惟光が門を開けて現れたので、白い扇は随身から惟光を通じて源氏に渡されたのである。

この一部始終を隣家の女たちは簾越しに見聞きしていたのであるが、まずは、背後はいかなる女たちであったかを明らかにしよう。作者はこの場では何も語っていないのだが、後に手がかりをいくつか断片的に挿入している。それらを拾い集めにかかろう。

「心あてに」歌を贈られた源氏はこの貧家に住む女君（歌の贈り手）にいたく心惹かれ、惟光に誰なのかを探らせる。その家の宿守の話では次のようであった。

「揚名介なる人の家になんはべりける。男は田舎にまかりて、妻なん若く事好みて、はらからなど宮仕人にて来通ふと申す（後略）」と聞こゆ。（ｐ１４０、以後巻名のないものは夕顔巻）

隣家は揚名介の家で今は留守をしており、風流な妻が居て、そこに宮仕えをしている妻の姉妹が来通っているという。この時点では、家主とは別に主人格の夕顔がいるかどうかは分かっていない。これを聞いた源氏は、「心あてに」歌の詠み手を「さらば、宮仕人ななり、したり顔にもの馴れて言へるかな」（ｐ１４０・１４１）と思う。通りがかりの男に女の方から詠みかけてくるのは、男たちとのやり取りに馴れた宮仕えの女房あたりに違いないと、源氏は勘ぐるのであった。これは「心あてに」歌の実作者が誰かにかかわる重要な手がかり[5]となる。後に再度触れる。源氏は自分に詠みかけてきたことを一方で憎からず思い、随身をして返しの歌を贈る。

寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔（ｐ１４１）

女たちは源氏の返歌が随身によって届き喜ぶ。

ィまだ見ぬ御さまなりけれど、いとしるく思ひあてられたまへる御側目を見すぐさでさしおどろかしけるを、答へたまはでほど経ければなまはしたなきに、かくわざとめかしければ、あまえて、「いかに聞こえむ」など言ひしろふべかめれど、めざましと思ひて随身は参りぬ。（ｐ１４１）

傍線部イは女房たちが車の貴人が横顔を覗かせたところを見過ごさずに詠みかけたと言っているわけで、冒頭場面のア同様、源氏が女たちに顔を見られていることを示している。次に点線部「いかに聞こえむ」など言ひしろふべかめれど」は返歌をどうしようと言い合っている。これから、「心あてに」歌も夕顔の自作ではなかったと古注釈は指摘[6]している。

惟光は源氏の女の素性を知りたいとの気持ちが分かるので、もっと探ってやろうと、この家の女房の一人と関係をつくり家に出入りするようになる。女房たちは車の音がすれば半蔀から外を

覗き、夕顔（惟光のいるところでは主人とは見えないように一女房の如くふるまっているが、惟光はこれが女たちが仕える主人と察知する）も這い寄ってくる。ある日、頭中将の車が通った時の様子を目撃し、源氏に報告する。

「（前略）人にいみじく隠れ忍ぶる気色なむ見えはべるを、つれづれなるままに、南の半蔀ある長屋に渡り来つつ、車の音すれば、若き者どもののぞきなどすべかめるに、この主とおぼしきも這ひわたる時はべべかめる。（中略）一日、前駆追ひて渡る車のはべりしをのぞきて、童べの急ぎて、『右近の君こそ、まづ物見たまへ。中将こそこれより渡りたまひぬれ』と言へば、またよろしき大人出で来て、『あなかま』と手かくものから、『いかでさは知るぞ。いで見む』とて這ひわたる、（後略）」（p149・150）

この時は童が頭中将の車と気づき、右近を呼ぶのであった。『源氏物語』における右近の初出である。これは冒頭場面と同様の状況であり、ここから冒頭場面でも右近がいたことは確実で、右近をいの一番に呼び、傍線部「またよろしき大人出で来て」とあることから、右近は女房たちのなかでも筆頭格であることが分かる。

この話を聞いた源氏は、女房たちが仕える謎の女（夕顔）は、帚木巻で頭中将が語った常夏の女と確信する。そこで、惟光に前回歌を詠み交わした源氏とおぼしき人物とは別人として、謎の女との逢瀬を実現するよう差配させるのであった。

惟光、いささかのことも御心に違はじと思ふに、おのれも隈なきすき心にて、いみじくたばかりまどひ歩きつつ、しひておはしまさせそめてけり。このほどのことくだくだしければ、例のもらしつ。（p151）

傍線部はどういうことだろうか。源氏は夕顔を頭中将が語った常夏の女ではないかと勘ぐっているので、源氏と知られた上で逢うのは憚られた。冒頭場面で相手は源氏と推測したわけで、源氏はあのときとは違う人物を装いたかった。乳母子の惟光は源氏の意にかなうように裏で差配し逢瀬を実現させたのである。惟光として源氏の乳母子であることは女たちに知られているので、表立って動くことはできない。点線部、くどくなるので書かないとするが、惟光がいかに主人の為に裏で奔走したか推理してみたくなる。

源氏が素性を知られないようにするくだりがある。

かの夕顔のしるべせし随身ばかり、さては顔むげに知るまじき童ひとりばかりぞ率ておはしける。もし思ひよる気色もやとて、隣に中宿りをだにしたまはず。（p152）

点線部、源氏は冒頭の時の人物と知られてしまわないよう乳母の家にも立ち寄らないという。もちろん、書かれてはいないが、惟光も素性を知られているのでお供は門前近くまでで消えるということだ。しかし、そこまで細心の注意を配りながら、傍線部、女の側に顔を知られている冒頭場面の随身を連れて行くのは、『評釈』も言うことだが、作者の不注意というしかない。

いったい、源氏はどうやって夕顔の家に忍び入ることができたのであろうか。冒頭の時の人物としてなら、夕顔の女房達は源氏として喜んで迎え入れたであろうが、あの時の人物ではない人物として忍び入ろうとしている。後の描写で分かるが惟光は冒頭顔を見られ、源氏の関係者と知られているので、忍び入っている貴人とは無関係を装い、この家のある女房に入れ込んで情報収集している。この源氏ならぬを装う源氏が忍び入る時は、惟光はお供は門前までで消えてしまうのだ。そんな人物をいったい誰が手引

きしたのだろうか。誰の手引きもなしに見ず知らずの男が入り込めるはずはない。不可解である。この場面は三輪山神話を下敷いていると言われるが、夕顔巻が全面的にそういうファンタジーに覆われているならば構わないが、夕顔巻も物語のリアリティを持った巻である。そのためにも、この不可解は解いておきたい。が、そのことは五条の家の女たちの素性を明らかにしてから述べる。

とにかく、源氏は忍び入ることに成功し、逢瀬を重ね、この常夏の女と思われる夕顔に耽溺してしまう。源氏は逢瀬を重ねるうち、この粗末な女の家に飽き足らず、八月十五日の翌明け方に、何某の院に女を連れ込むのであった。事件は十六日の宵過ぎるほどに起こった。寝入っているときに、女の枕上に物の怪がとりつき、女は息絶えてしまったのである。夕顔の素性は自身からはとうとう明かされないままであった。

夕顔の素性については亡くなった後、右近が源氏に問われ次のように答えている。

親たちははや亡せたまひにき。三位中将となん聞こえし。いとらうたきものに思ひきこえたまへりしかど、わが身のほどの心もとなさを思すめりしに、命さへたへたまはずなりにし後、はかなきもののたよりにて、頭中将なん、まだ少将にものしたまひし時見そめたてまつらせたまひて、三年ばかりは心ざしあるさまに通ひたまひしを、去年の秋ごろ、かの右の大殿よりいと恐ろしきことの聞こえ参で来しに、もの怖ぢをわりなくしたまひし御心に、せん方なく思し怖ぢて、西の京に御乳母住みはべる所になん這ひ隠れたまへりし。それもいと見苦しきに住みわびたまひて、山里に移ろひなんと思したりしを、今年よりは塞がりける方にはべりければ、違ふとて、あやしき所（筆者注　五条の家）にものしたまひしを（筆者注　源氏に）見あらはされたてまつりぬることと思し嘆くめりし。（p185．186）

夕顔の父は三位中将で公卿であったが、はかばかしく娘をもてなすことができずに早世してしまう。当時配下にいた関係であろうか、少将であった頭中将が見初めることになったが、正妻の右大臣家筋からの脅迫で西の京の乳母の家に逃げ隠れた。そこも住みづらくなり山里に移ろうとしたが方角が塞がっており、五条の家に移り隠れていたところを源氏に見つけられたという。ここではじめて西の京の乳母が出てくる。

そして、源氏が夕顔の年を尋ねた時に右近は自分の事にも言及している。

（筆者注　夕顔は）十九にやなりたまひけん。右近は、亡くなりにける御乳母の捨ておきてはべりければ、三位の君のらうたがりたまひて、かの御あたり去らず生ほし立てたまひしを思ひたまへ出づれば、いかでか世にはべらんとすらん。**いとしも人に**と悔しくなん。ものはかなげにものしたまひし人の御心を頼もしき人にて、年ごろならひはべりけること（p187・188）

傍線部、夕顔には西の京の乳母とは別にもう一人の乳母がいて、それが右近の母なのだが早くに亡くなり、不憫に思った夕顔の父三位中将が右近を引き取り夕顔とともに育てくれたといい、それを恩義に思う右近は夕顔を亡くしてどうして生きてゆけようかという。ここではじめて、右近は夕顔の乳母子であることが明かされる。主人を失ってしまった深い悲しみを太字部「いとしも人に」

と引歌（「思ふとていとしも人にむつれけむしかならひてぞ見ねば恋しき」[8]）で伝えているが、右近の和歌の素養がそれとなく仄めかされている。

五条の家から夕顔と右近が消えてしまった後、残された女たちが騒ぐ様が描かれている。

この（筆者注　五条の家の）家主ぞ西の京の乳母のむすめなりける。三人その子はありて、右近は他人なりければ、思ひ隔てて御ありさまを聞かせぬなりけりと泣き恋ひけり。（p193）

ここで、五条の家の女たちの素性がはじめて明らかになる。先にあった揚名介の妻とそのはらからとは西の京の乳母の娘三人であった。そこに方違えで夕顔が右近を伴って移り隠れていたのである。が、同じ乳母子とはいえ右近は夕顔とともに育てられてきたゆえに、夕顔との絆の強さは別格でいつも側に寄り添う関係にあり、女房としては筆頭格であったと思われる。五条の家では、右傍線部のように乳母子間には「隔て」の感情があった。

以上、作品にちりばめられた手がかりをつなぎ合わせると、冒頭場面の背後にいた女たちの素性と関係が判明する。こういう乳母子間の微妙な関係は、当時の読者には目ざとく読み取られていたものと思われる。

（3）右近の行動

さて、乳母・乳母子の行動を論ずる吉海直人氏は夕顔の君への右大臣家の脅迫については、

「四の宮の乳母が実行したと考えていいのだろう。（中略）乳母はそんなことまでやりかねないという潜在的共同理解（共同幻想）があるからこそ、こういった疑いがかけられるのである」

と述べ、終わりを次のように結んでいる。

「乳母は（中略）描かれているか否かにかかわらず、いかなる時にでも身近に存在し、しかもその存在自体が大きな意味を有していたのである[9]」

ならば、片やそれに対抗すべく誰に劣らぬ主人思いの右近としては、主人の今の逼塞状況を打破しようとの強い使命をいだいていただろう。冒頭場面においては、書かれていなくとも右近は行動したとみてよい。源氏の乳母といわれている隣家の門前にやつし車が止まり、貴人と思しき人物が当家の白い花に目をとめて、古今に載る花の名を問う旋頭歌の一節を口ずさんだ。車から覗く横顔と声から、もしやこれが噂に聞く源氏の君かと想像され、ご主人様はいまでも頭中将様が探し当ててくれると願い続けて車が通れば皆して覗いているが、それもむなしい望みであり、この千載一遇の機会を逃すわけにはいかないと咄嗟の行動に出たのである。貴人の独り言に随身が花の名を答えたのが聞こえたが、右近のほうも古今に通じている和歌の素養の持ち主であった。源氏が引いた１００７旋頭歌の次の１００８もやはり旋頭歌で「春されば野辺にまづ咲くみれど飽かぬ花　幣（まひ）なしにただ名告るべき花の名なれや」と続きものの掛け合いになっているのが浮かんだはずだ。ここは、源氏の君の関心を蒙ったのだから、女の側から名告って出るべきと即断した。すると、古今２７７、躬恒の花の名で結ぶ歌「心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花」がふと浮かび、その歌のリズムにのせて名告りの歌が

口を衝いて出たのだ。源氏の情けを比喩する「白露の光」を織りこみ、その情けをいただいて輝く「夕顔の花」ですと名告り上げたのである。そして、夕顔の君の移り香の染みこんだ白い扇に散らし書きし女童に差し出させた。右近の和歌リテラシーがここぞとばかり発条した時である。頭中将様への未練を捨てきれないご主人にまかせておいたら何も起きぬと右近が動いたのであった。

以上の如き推理は冒頭場面には何ら語られていないが、後の手がかりとなる断片を拾い集め、吉海氏の論ずる乳母・乳母子の行動原理を踏まえ、そして、右近の和歌リテラシーを重ね合せればそのように繋がる。作者は古今の連続する三つの旋頭歌を右近の和歌リテラシーに内在させ、その発条が端緒となる物語を構想したのである。しかも、夕顔巻では古今１００７・１００８に反応したのが誰かは判然とはしないようにして。

吉海氏の見解を踏まえれば、当時の読者には乳母や乳母子に対する共同理解（共同幻想）があり、書かずとも察知され、そのほうが大構想の立ち上がりとしては奥ゆかしい。源氏が「心あてに」歌を見た後で心内語として「さらば、その宮仕人なり、したり顔にもの馴れていへるかな」とあるのは、源氏の心内を通して、女房の代作であることが仄めかされている。次に頭中将の車が通りかかる場面で女童に「右近の君」と呼ばせて、はじめて右近が登場する展開は、冒頭場面でも右近が背後にいて主導していたことを匂わせている。そして、夕顔の死後右近が源氏に自分の生い立ちを語るところで、夕顔とともに育てられたことを知れば、女君との絆において他の乳母子たちとは別格であったことが分かる。さらに十六年後、成長した玉鬘に再会したときに、右近は、古今の１００９旋頭歌を引歌にして玉鬘に詠みかけた。当時の和歌に敏感な読者には、この時の右近の和歌の素養と、夕顔巻冒頭の女の側として古今１００７・１００８の旋頭歌に反応し、躬恒歌の引歌で名告ってみせた和歌の素養とが繋がったはずである。右近の和歌リテラシーが物語の端緒となるように仕組まれていた。ただ、夕顔巻冒頭場面では、右近の存在を晦まし読者の推理に委ねるというこの作品ならではの韜晦の手法がとられた。

以上のように、筆者は「心あてに」歌の作者は右近であると主張する。それは田中氏がすでに論じたことであるが、筆者は右近の和歌リテラシーに注目するので、冒頭場面で源氏に詠みかけられた歌は主人夕顔のための名告り歌でなければならないと考えるもので、そこから歌の解釈については、田中氏（田中氏は後に述べる「夕顔の花」＝源氏の説をとる）とは袂を分かつのである。

そこで、「心あてに」歌の解釈に入るのであるが、その前に、源氏がどうやって夕顔の家に忍び入ったかの不可解について推理しよう。

作者が省筆する場合、つまらないことは書かないという場合と、想像に難くないことは書かないという場合があり、ここは後者なのである。当時の読者には想像に難くないことなのだ。惟光も、源氏の乳母子として懸命に源氏に尽くそうとする。ここはやはり吉海氏のいう乳母子の活躍するところだ。惟光は夕顔の家に来通う姉妹が宮仕えであることを知っているので、尚侍司のつてを使って、自分の名は明かさないようにして、人づてに姉妹に身分は明かせないとしながらある身分の高い人の導きを頼んだと推測できる。姉妹としても、頭中将に代わる頼れる人を見つけなければという思いはあったはずで、これはいい機会とその貴人の手引きを引き受けた。西の京の姉妹と右近は夕顔の乳母子同士で、そ

れぞれ独自に夕顔に尽くそうと張り合っている。右近が歌の素養をもって源氏らしき男に関心を惹かせたのに、その男は以後現れない。西の京の姉妹達も、ならば我らもと思っているところに、名前は伏せられたが、さる貴人の導きを頼まれた。姉妹たちも主人夕顔の窮状打開を図ろうとしたのである。「このほどのことくだくだしければ、例のもらしつ」とはそのような類のことで、物語としてのリアリティのあることであった。

（4）「心あてに」歌の解釈

筆者の解釈の基本とするところは、主人夕顔を源氏に知らしめる名告り歌で右近の代作ということなのであるが、まずは、従来の解釈がどのように分かれてきたかを示そう。筆者は4つに分類する。どれも夕顔の自作歌としている。

1．『花鳥余情』[10]『細流抄』[11]の解釈で、『新編』が踏襲している。左は『新編』の現代語訳。

「当て推量にあのお方（筆者注　源氏の君）かしらと見当をつけております。白露の美しさで、こちらの夕顔の花もいっそう美しくなります」[12]

2．『源氏物語玉の小櫛』[13]の解釈で、『全書』[14]『全集』[15]『玉上評釈』[16]『集成』[17]『大系』[18]『新大系』[19]が踏襲している。左は『全集』の現代語訳。

「あて推量であの方―源氏の君かとお見受けします。白露がその輝きを増している夕顔の花（筆者注　源氏の比喩）―夕影の中の美しい顔を」[20]

3．黒須重彦氏の解釈

「そこにいらっしゃっている方は、もしやあなた（頭中将）さまではありませんか。もしそうなら、このようにむさくるしい五条あたりに、あなたのように高貴な方の御光栄をいただいて、いやしき花（筆者注　夕顔の君の比喩）の咲くこのあたりも光輝くようでございます。」[21]

4．清水婦久子氏の解釈で、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』が採用。

「あなた様がお尋ねの花は、白露の光にまぎれて見定め難いのですが、当て推量で、おそらくその花だろうか、と見当をつけています。あなた様の光が添えられて輝いている夕顔の花（筆者注　夕顔の君の比喩）を」[22]

以上の4つの解釈がどのような違いを見せているかを分かりやすく解説するために、冒頭場面の2つの文脈に注視する。一つは「女たちがやつし車の貴人を源氏と当て推量していること」でXとする。もう一つは「源氏が関心を示したのが夕顔の花であること」でYとする。この歌は二句切れなので、上の句「心あてにそれかとぞ見る」と、下の句「白露の光そへたる夕顔の花」に分かれる。文脈X、Yが上の句、下の句にいかに詠みこまれたかの視点でそれぞれの現代語訳を検討してみよう。

1．上の句はXを詠みこみ、下の句はYを詠みこむ。上の句を受けて「白露の光」は源氏の比喩、「夕顔の花」は夕顔の君の比喩とする。

2．Xのみを詠みこんだもので、上の句の「それ」は下の句の「夕顔の花」を指す。したがって、「夕顔の花」は源氏の比喩とする。

3．上の句はXを詠みこむが、頭中将と推測したとする。下の

句はYを詠みこむ。上の句を受けて「白露の光」は頭中将の比喩、「夕顔の花」は夕顔の君の比喩とする。

4．Yのみを詠みこんだもので、上の句の「それ」は下の句の「夕顔の花」を指す。したがって、「夕顔の花」は夕顔の女君の比喩とする。

以上の説明で分かるように、それぞれの解釈の違いは文脈X、Yをどう取り込んだかによる。1，3は一つの歌に二つの題を詠みこんだことになり、歌のいろはに反する。近江の君の歌のように意図的にはずす場合は別として、作者がそんな歌を作る筈はない。その意味で、1，3の解釈は疑問であると、この時点ではしておく。

次に、「夕顔の花」は夕顔の女君の比喩か源氏の比喩かという問題である。『花鳥余情』が「夕顔の花」＝夕顔の君の比喩、あるいは、『細流抄』が花そのものとしたことは、極めて筋が通っている。これは黒須氏が著書[23]で指摘していることだが、「夕顔の花」について、冒頭場面に戻り、傍線部a、b、cを見ていただきたい。左に、『新編』の本文と現代語訳を載せる。

a随身「かうあやしき垣根になん咲きはべりける（こうしたみすぼらしい垣根に咲くものでございます）」

b源氏「口惜しの花の契りや（情けない花の運命よ）」

c童「枝も情なげなめる花を（枝も風情のなさそうな花でございます）」

こんなに貶められた花を源氏の比喩にして詠みかけるはずはない。しかも、これが後に女君の呼称になったのである。黒須氏は、これを指摘するための裏付けとして、わざわざ著書に序章「夕顔とはいかなる花か」を設けて、夕顔という花は『源氏物語』の時代まで和歌文学の関心外に置かれていたことを述べられている。

筆者の観点からは、cの童の発言は右近が随身と源氏のa、bの会話を聞いて童に言わせたもので、その右近が、「夕顔の花」を源氏の比喩にするはずがない。宣長ほどの読み手がa、b、cのことに一切触れていないのは非常に不可解である。したがって、2は受け入れがたいのであるが、多くの現代注釈書がこれを踏襲しているわけで、この批判だけで済ますわけにはいかない。宣長の解釈を詳しく吟味してみたい。それは非常に難解なのであるが、4の清水氏の分析を適用すると宣長の解釈の難点があぶり出される。

『源氏釈』以来、どの注釈書も「心あてに」歌には引歌として古今277、凡河内躬恒の歌「心あてに折らばやおらむ初霜の置きまどはせる白菊の花」（以後、躬恒歌とする）を指摘してきた。しかし、何の解説もなくただ載せるだけであった。この躬恒歌の構造分析をしてみせ、「心あてに」歌の解釈に適用したのが清水氏である。

躬恒歌と「心あてに」歌はそれぞれの句々が完全な対応関係をみせている。躬恒歌の構文形式そのものを引いている本歌取りのようなものだ。躬恒歌では、「心あてにをらばやをらん」の動詞「折る」の対象語は「白菊の花」であり、同じ白によって白菊を見分け難くしているのが「初霜」なのである。それに対応し、「心あてにそれかとぞ見る」の対象語は「夕顔の花」であり、それに輝きを与えて本来の素朴な花とは見分け難くしているのが「白露の光」である。

清水氏の要点は、二句の「それかとぞ見る」の対象語は五句の「夕顔の花」であることと、三四句の「白露の光そへたる」は五

句の「夕顔の花」を見分け難くするものという二点である。

清水氏の分析に説得力があるのは、作者がこの躬恒歌の構文形式で類歌を他に三首詠んでいることだ。

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな　（紫式部集、一）

おぼつかなそれかあらぬかあけぐれのそらおぼれする朝顔の花　（同、四）

心あてにあなかたじけな苔むせる仏の御顔そと見えねど[24]　（同、八二）

『紫式部集』に載る三首とも、「それ」「そ」はそれぞれ五句「夜半の月」「朝顔の花」および四句「仏の御顔」を指し、「雲がくれ」「あけぐれ」「苔むせる」が五句、あるいは、四句を見分け難くする原因になっている。また、源氏の返歌も躬恒歌の構文形式を完璧になぞっている。「それ」は五句「花の夕顔」を指し、三四句「たそかれにほのぼの見つる」が五句「花の夕顔」を見分け難くするものなのだ。だから、今度は近寄ってしっかり見たいと言うのである。

この清水氏の躬恒歌の構造分析が、宣長の解釈を吟味するのに極めて有効となる。次に宣長の解釈の本文を載せる。

源氏君を、夕顔の花にたとへて、①今夕露に色も光もそひて、いとめでたく見ゆる夕顔の花は、なみ〳〵のひととは見えず、心あてに、源氏君かと見奉りぬと也、②三四の句は、白露の、夕顔の花の光をそへたる也、露の光にはあらず、細流に源氏と推したるによりて、花の光もそひたると也とあるは、いみしきひがごとなり、③二の句のてにをはにかなはず、[25]

これは非常に分かりにくい。肝心なことを説明していないからだ。傍線部①より、宣長は「夕顔の花」＝源氏としていることは分かるが、なぜそうなのかの説明は一切ない。それこそが最も重要なことなのだ。宣長以前の古注釈の解釈では、「夕顔の花」＝夕顔の君又は花そのものなのだから、それを覆している以上、それを説明すべきだ。なぜしないのか、その理由を筆者は次のように推測する。宣長は物語の文脈Xは誰もが分かりきったことで、それに上の句が完全に合致する以上、この歌はまさしくXを詠む歌であると決め込んだのである。宣長は躬恒歌がそうであるように、二の句の「それかとぞ見る」の対象語は五句の「夕顔の花」であることは、歌のリズムとして理解していた。したがって、源氏と当て推量している以上、当て推量の対象語である「夕顔の花」は言うまでもなく源氏の比喩だという理屈なのである。上の句も下句もXを言う歌と解釈した点は宣長は歌のいろはを弁えている。

では、それは一理あると認めて傍線部②③を検討しよう。

②も分かりにくいが、「白露の」「光そへたる夕顔の花」と読むのであって、「白露の光そへたる」「夕顔の花」と読むのではないと言っている。①の「今夕露に色も光もそひて、いとめでたく見ゆる夕顔の花」はそれの宣長の訳文なのだ。宣長は「夕顔の花」＝源氏だから、光るのは「夕顔の花」でなければならず、「白露」は源氏の比喩ではなく、花におく自然の露で、その露を通して花の光が輝き増すのだとする。『細流抄』は「（白）露の光」＝源氏とし、その光が「夕顔の花」に添うと解釈したが、それは間違いだという。③の「二の句のてにをはにかなはず」とは二の句の対象語のことを言っており、『細流抄』の解釈だとそれが「（白）露の光」になってしまうが、それは歌のリズムを理解しておらず、正しくは五句「夕顔の花」であるといっている（筆者の理解では、

『細流抄』の二の句の対象は歌中にあるのではなく、上の句全体が文脈Xを言っている）。

宣長は、躬恒歌の二句が五句を指すことは気づいていたが、三四句が五句を見分け難くするものであることには気づいていなかった。宣長の下の句の訳文①「今夕露に色も光もそひてめでたく見ゆる夕顔の花」をさらに現代語訳すると、「今夕、露を通して、花の色も光も増して、めでたく見える夕顔の花（源氏）」ということである。これだと、源氏は見分け難くなるどころか、いかにも噂の源氏らしく輝く御方ということだ。くり返すが、宣長はこの点で躬恒歌を理解していなかったのである。やはり、「夕顔の花」＝源氏に無理がある。

ちなみに、宣長説を踏襲する現代注釈書の下の句の現代語訳を見てみよう。傍線部が三四句の部分である。

『全書』白露が光を一入加へた夕顔の花のやうな美しいあなた様を

『全集』白露がその輝きを増している夕顔の花―夕景の中の美しい顔を

『評釈』白露に光る夕顔の花、光り輝くあなた様

『集成』白露の光にひとしお美しい夕顔の花、光り輝く夕方のお顔は

『大系』白露が光沢を添えて居る夕顔の花の如き、夕方の顔の美しい方を

『新体系』白露の光をつけ加えている夕顔の花を

よく読んでみれば、『評釈』以外どれも、源氏の比喩でない「白露」が「光」を発するのはおかしいとした宣長の苦慮を理解しなかったらしいが、どちらにせよ「夕顔の花」＝源氏とする限り、躬恒歌の三四句が五句を見分け難くするものであることには反する。そのことは考慮外のことであったと思われるが、作歌上、「心あてに」歌は躬恒歌をなぞるようにして口を衝いて出てきたことは明らかである。

次に、上の句の「それ」を頭中将を指すとした黒須説を吟味しよう。夕顔は今でも頭中将のことを思っており、他の男に女君から詠みかけるはずはないを根拠とするもので、詠みかけたとしたら、それは頭中将と思い違いしたに違いないというのである。これはすでに多くの方が指摘することだが、冒頭場面ア「誰とか知らむとうちとけたまひて、すこしさしのぞきたまへれば」や、源氏から返歌をもらった時の場面イ「御側目を見すぐさでさしおどろかしけるを」で明らかなように、女たちは車の窓から不用意に覗いた貴人の顔を見ている。随身と会話する声も聞いている。だから、その貴人を頭中将と見間違えるはずはない。寄りかかる根底が崩れてしまうのである。黒須氏はこの点にはいっさい触れていない。たしかに、女たちは頭中将が探し当ててくれることを願い外を通る車に注視していた。だからといって顔を見、声を聞いた人物を頭中将と思い込むはずはない。黒須氏は見たこともない人をどうして源氏と推測しうるのかというが、隣家が源氏の乳母の家であることを知らないはずはなく、そこに止まるやつし車から貴人が顔を覗かせれば、源氏ではなかろうかと期待するのは当然のことである。

また、歌の解釈として、「白露の光」の「露」が、常夏の女が詠んだ「山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露」の「露」の連想から頭中将だとする。つまり、「白露の光」＝「頭中将の光」となる。しかし、「光」こそ『源氏物語』では

専ら源氏の連想に使われる言葉で、それ以外に使われることはない。したがって、「露」＝頭中将の連想と「光」＝源氏の連想のどちらが強いかと言えば後者であろう。

黒須氏は「二の句の対象語は五句」に気づいていて、歌の呼吸（筆者が歌のリズムというもの）としては、そう読めるが、ここはそれに従うのは間違いだとする。「この部分は、紛れようもなく、当て推量にそこにいらっしゃるのを、だれそれと見ます、という意味です[26]」と主張する。つまり、上の句が物語の文脈Xそのものだからというのだ。下の句については、清水氏の解釈に通じていて、三四句が五句を見紛うばかりにするものだが、それが源氏の光ではなく頭中将の光なのである。

黒須説では、見間違えない限り夕顔が頭中将以外の男に詠みかけるはずはないわけで、見間違えずに詠みかけたならば、それは別の者が代作したことを裏打ちすることになる。

最後に4である。宣長はXという文脈しか見なかったが、同等の重きでYという文脈があり、Yを詠みこんだとするのが清水氏である。その上で、何といっても傾聴すべきは作者が躬恒歌に完璧に同調して作歌していることを見抜いたことだ。清水氏は「この歌は、「あて推量にあなた様は源氏の君かとお察しします」という失礼なせりふではなく、「あやしき垣根」に咲く夕顔の花が（同色の）白露の光につつまれた美しい光景を描きながら、高貴な人が「花の名」を問うたことに対する答えと挨拶の歌だったのである[27]」と述べ、積極的に夕顔自作歌であるとする。

以上当該歌に四つの解釈があり、それぞれを吟味した。そこで、筆者の「心あてに」歌の解釈を述べよう。今まで述べてきたように源氏に詠みかけたのは乳母子右近の仕業でしかなく、源氏と随身の引歌による会話に即座に右近の和歌リテラシーが発条し、躬恒歌が念頭にのぼり、「心あてに」歌が難なく口を衝いて出たもので、源氏に主人夕顔を知らしめるための名告り歌なのである。したがって、文脈上のYを詠みこんだもので、その観点から歌の解釈には清水氏に賛同するのだが、夕顔自作ではなく右近の代作である。どんなに清水氏の解釈が慎ましい意味であろうとも、黒須説を逆手に取れば、夕顔は頭中将以外の男に詠みかけることはありえない。

さて翻ってみるに、実際の詠歌である躬恒歌と物語歌を同列に扱うことには慎重であるべきではなかろうか。上の句が文脈X「女たちがやつし車の貴人を源氏と当て推量していること」にあまりにもうまく合致していることは、やはり物語として無視できない。実際、『花鳥余情』『細流抄』や黒須氏は上の句をXと受け取ったし、宣長は歌全体をXとみたわけである。作歌上は間違いなく清水氏が説くように完璧に躬恒歌の構造に倣って詠まれているのだが、物語の文脈に影響を受けた読み手の解釈が生まれてもよいのではないかと考える。『源氏物語』ゆえの物語歌の特殊性である。つまり、上の句の「それ」には二つの推量の意味が掛けられていると見てもよしとするのである。先に歌のいろはに反すると言ったが、この場合の物語歌の特殊性として、一歌二題を認めることになる。現代語訳にすると次のようになる。

「当て推量にあのお方、源氏の君かしらと推測いたします。それと見まごうばかりに（源氏の君の）白露の光を受けて輝いている（普段は目立つことのない）夕顔の花（夕顔の君）です」

その上で、もう一度「心あてに」歌は誰が詠んだ歌かに立ち

どってみよう。現代注釈書のすべてが女君自作説をとるのは奇怪である。源氏の心内語として、「さらば、その宮仕人なり、したり顔にもの馴れていへるかな」とわざわざ書いて、源氏が詠み手は男馴れしている後宮に仕える女房などの仕業と気づいていることを示した。源氏の受け取り方に反する読みをする必要があるのだろうか。これはやはり右近の存在を軽視してきたことによると思われる。あのとき、主人夕顔にまかせておけば詠みかけることなどしなかったに違いない。逼塞状況を打開するにはこちらから詠みかけるしかないと乳母子ならではの行動に出た。右近の代作とするならば、源氏の受け取り方と辻褄があう。右近は宮仕えではないなどという主張は、理に走りすぎている。源氏の理解は、馴れた歌の詠める女房風情と拡大解釈してかまわないように思われる。

この源氏の心内語で示された受け取り方は、後に重要な意味を持つ。何某の院での源氏と夕顔との贈答歌の解釈に関わるのである。

源氏「夕露に紐とく花は玉ぼこのたよりに見えしえにこそありけれ　露の光やいかに」とのたまへば、後目に見おこせて、

女「光有りと見し夕顔の上露はたそかれ時のそらめなりけり」とほのかに言ふ。をかしと思しなす。（p161・162）

先にも述べたように、この物語は非常に複雑で、巻冒頭で夕顔の家の女たちに見られた源氏とおぼしき人物とは違う人物を装って源氏は、その家に忍び入り素性を知られないために暗闇のなかで夕顔と情交を重ね、夕顔も暗闇の中の感触でそれなりの身分の方と思って迎えていたのである。源氏はこの贈歌に「露の光やいかに」を付すことで、あのとき「心あてに」歌を贈られた者、つまり、源氏であることを初めて明かした。これは添え句の手法で、普通添え句は古歌の部分句を添えるものだが、歌を共有しているという点では相手から贈られた歌の部分句を使うのも効果は同じといえる。

贈歌に添え句が付された場合、相手は添え句に向かって切り返すのが作法であった。夕顔は「光有りと見し夕顔の上露は」ともっぱらあの時の歌の下の句を再構成して、それを「そらめなりけり」と切り返したのである。これをもって、やはり「心あてに」歌は女君の自歌であったと判断する向きも多い。『全集』は「心あてに」歌の頭注に「この歌を作ったのは、後文によって夕顔と見るほかないが、その内気な性格と矛盾する言動だといわれる」（p214）とあり、その「後文」とはこの夕顔の返歌を指すものと思われる。つまり、「心あてに」歌を詠んだ者でなければ「光有りと見し夕顔の上露は」と返せないので、それは夕顔の自歌と認めるしかないとするようだ。だが、それは単純すぎるのではなかろうか。それとはまったく逆の解釈をしたのが三条西実枝である。『岷江入楚』の「心あてに」歌の解説の「箋義曰」以下の本文を載せる。

A木枯の女のことくならは此歌尤夕顔上の詠なるへし夕顔上はさやうのかろ〳〵しき人にはあらす自歌とは称しかたし

B自然官女なとの私の義としてかくのことき時相かはりて詠する事も有へし然は夕顔上の歌にあらさる所も決しかたし所詮作者をつけすして見る義可然歟

C奥に光ありとみし夕顔のうは露はたそかれ時のそらめなりけりと有弥疑を決すへし

D又此次の詞に夕顔上の歌にあらさるよし分明也[28]

Aは夕顔の性格からして夕顔自作とはいえないとする。Bは官女が代作したのなら主人の歌といえなくもないので作者を決めないのがよいといっている。『全集』『新編』はそのように歌の上に詠者を付していない。C、Dの記述は説明不足なので、どういう意味か筆者の解釈を述べる。

Cについては、「そらめなりけり」は夕顔の代作者である官女（女房）への揶揄と三条西実枝は読みとり、夕顔自作の歌でないとの疑いは確かだというのである。

Dについては、傍線部「此次の詞」がどれを指すのかが不明。返歌の直後の「ほのかに言ふ」は、ただ夕顔の慎ましい性格をあらわしているだけで、「此次の詞」が指すものとは思えない。だとすれば、指すのは次の「をかしと思しなす」という源氏の心内語である。源氏は「心あてに」歌を「さらば、宮仕人なり、したり顔にもの馴れて言へるかな」と見抜いていた。実枝はこれが夕顔の自作でないことの証左だといっていた。[29]「そらめなりけり」と聞いて、源氏は「女房のそらめ」との夕顔の本音が出たと受け取ったのである。それを源氏は、「をかし」と思ったのであろう。これは現代語の「可笑しい」ととっていいと思う。実枝の説明不足を筆者はそのように解釈する。『全集』は「「思しなす」はしいて思うの意。夕顔への執心が手つだって、ことさらに感興をおぼえるのである。[30]」と頭注で解説している。また、『評釈』は、「作者は女の返歌を、よいとは思わない。男君が情熱のあまり「をかし」と思いなさるだけのことだ、と、ことわるのである[31]」と解説している。しかし、北山谿太氏の『源氏物語辞典』[32]の「なす」の項によれば、「複合する動詞の連用修飾語に対応し、又は、しかじかと・しかじかなりとなどの補語に応ずべく添加する語。有意的になすの意にはあらず」とある。つまり、「おかしと」という「思す」の補語に応じて添加されたもので、特別な意味はないということだ。したがって、ここも、単に「（「右近のそらめ」という意味にとって）源氏は可笑しくお思いなさった」ということで、「なす」に「しいて」の意味を見る必要はない。

また、「そらめなりけり」の歌全体の解釈も単純ではない。大方の現代注釈書は「源氏の君が光輝いていると見たのはたそがれ時の見間違いでした」という夕顔らしからぬ大胆な切り返しの歌とする。そんな読みをすれば夕顔遊女論が出るのもいたしかたない。[33]ここは清水氏の「心あてに」歌の解釈に立てば、もっと慎ましい意味の切り返しで、「あのとき源氏の君の光（情け）をいただいたと見たのはたそがれ時のそらめでした」となる。その裏には、「それは右近のそらめ」という意味があり、大胆に源氏に詠みかけ、白扇に書いて差し出すまでした右近への揶揄の気持ちがこめられている。源氏もその意を読みとり「おかし」と思ったのである。

（5）終わりに

以上、夕顔巻における右近の乳母子としての行動原理に右近の和歌リテラシーを重ね合せてみると、「心あてに」歌は右近の代作であったと考えられる。それによって、歌の解釈も狭まる。それは古今１００７・１００８旋頭歌を念頭にしたものである以上、主人夕顔のための名告り歌であるに違いなく、おのずと「夕顔の花」＝夕顔の君となり、宣長の「夕顔の花」＝源氏という解

釈は受け入れ難い。そもそもは、源氏は「さらば、宮仕人ななり、したり顔にもの馴れて言へるかな」と気づいており、これについて、三条西実枝は官女の代作と断言した[34]。にもかかわらず、現代注釈書の多くがこれを無視し、夕顔自作としてきた。それはひとえに、右近の存在を軽視してきたからに他ならない。実枝にしろ、官女といっているだけで、右近と限定してはいない。女房たちの合作ぐらいに考えていたのだ。右近は四人の乳母子たちの中でも、夕顔に常に寄り添う親密な関係で誰よりも主人思いなのである。冒頭場面において、乳母子としての使命感に突き動かされて、大胆にも源氏に詠みかける行動に打って出るのは右近を措いていない。しかも、源氏の古今旋頭歌の部分句を口ずさんだことに即応して、古今の躬恒歌の引歌で答える和歌リテラシーの持ち主は、玉鬘巻の連想から、右近だと察せられる。

夕顔巻では、右近の存在感が注釈史において軽すぎたように思うのだが、実際、作品は意図的に右近の存在を目立たないように書いた。なぜなら、結局は主人夕顔を死なせてしまうわけで、冒頭場面で右近が表立って動いたように書くことは憚られたのだろう。その方が作品としても奥ゆかしく、抑えた分、玉鬘巻では右近は存分に表立った活躍を見せた。両巻を通じて右近の和歌リテラシーは一貫しているのだが、夕顔巻ではそれは晦まされたのである。

〔注〕

（1）小野真樹「『源氏物語』玉鬘巻と和歌リテラシー」（『日本文学論究第七十四冊』國學院大學國文學會　平成27年3月）

（2）『源氏物語』の本文は『新編日本古典文学全集　源氏物語1』（小学館　平成6年）を使用する。

（3）吉海直人「浮舟の周辺―乳母のいる風景―」（『國學院雑誌』89・6　昭和63年6月）

（4）田中喜美春「夕顔の宿りからの返歌」（『国語国文』京都大学文学部国語学国文学研究室　平成10年5月）

（5）『岷江入楚第一巻　源氏物語古注集成第11巻』「箋宮つかへ人ならてはかやうにかる〳〵しき事はあらしと源のおほす也夕顔上の歌にあらさる事みえたり」とある。p251（桜楓社　昭和55年）

（6）5書「箋此詞にて夕顔の所作にあらさるよしみえたり」とある。p253

（7）玉上琢彌『源氏物語評釈』「作者の不注意か。現代ではわからない事情が何かあるのだろうか」第一巻　p386（角川書店　昭和48年）

（8）片桐洋一編著『拾遺抄』、島根大学図書館本『拾遺抄』330・読人不知（大学堂書店　昭和52年）

（9）吉海直人「浮舟の周辺―乳母のいる風景―」（『國學院雑誌』89・6　昭和63年6月）

（10）『松永本花鳥余情　源氏物語古注集成第1巻』「夕かほは女のわか身にたとへてよめり露の光は源氏によそへたるへし（後略）」p40・41（桜楓社　昭和53年）

（11）『内閣文庫本細流抄　源氏物語古注集成第7巻』「心あてにとはをしあてにと也源氏にておはしますと推したるによりて花の光もそひたると也（中略）花鳥夕かほは女の我身にたとへてよめりと云々此義いかゝとおほえ侍り」p41（桜楓社　昭和60年）

(12) 2書の現代語訳（p139）
(13) 『本居宣長全集　第四巻　源氏物語玉の小櫛』（筑摩書房　昭和44年）
(14) 『日本古典全書　源氏物語1』現代語訳「当推量に源氏君かと思つた事です白露が光を一入加へた夕顔の花のやうな美しいあなた様を」p245・246（朝日新聞社　昭和49年）
(15) 『日本古典文学全集　源氏物語（1）』p213（小学館　昭和48年）
(16) 7書、現代語訳「あて推量ながら、あるいはと存じまする。白露に光る夕顔の花、光り輝くあなた様はもしや…」p354
(17) 『日本古典集成　源氏物語1』現代語訳「当て推量ながら、源氏の君かと存じます。白露の光にひとしお美しい夕顔の花、光り輝く夕方のお顔は」p125（新潮社　平成17年）
(18) 『日本古典文学大系　源氏物語1』現代語訳「当て推量で、源氏の君かとどうも、私は見ます、白露が光沢を添えて居る夕顔の花の如き、夕方の顔の美しい方を」p127（岩波書店　昭和48年）
(19) 『新日本古典文学大系　源氏物語1』「推量ながらあなたさま（源氏の君）かと見るよ、白露の光をつけ加えている夕顔の花を。」p103（岩波書店　平成5年）
(20) 15書p213。
(21) 黒須重彦『夕顔という女』（笠間書院　昭和50年）
(22) 『源氏物語の鑑賞と基礎知識　8夕顔』p38（至文堂　平成12年1月）。論文としては「光源氏と夕顔―贈答歌の解釈より―」『青須我波良』第46号（帝塚山短期大学日本文学会　平成5年12月）
(23) 21書p22～p25。
(24) 笹川博司『紫式部集全釈』（風間書房　平成24年）
(25) 13書p374
(26) 21書p22
(27) 22論文p26・27
(28) 5書p250
(29) 注5
(30) 15書p236
(31) 7書p408
(32) 北山谿太『源氏物語辞典』（平凡社　昭和55年）。11書で黒須氏が「なす」について、この辞典より引用している。
(33) 円地文子『源氏物語私見』「夕顔と遊女性」p17～21（新潮社　昭和49年）
(34) 注5